

元プロ野球選手らしい長身、がっちりとした体躯。「現役時代とは雲泥の差」と言いながら、今も石毛宏典氏の身のこなしは軽い。つい3年ほど前まで、オリックス・ブルーウェーブ（現オリックス・バファローズ）の監督を務め、現場のユニフォーム組として活躍してきた。四国アイランドリーグの総帥となった現在は、背広姿もすっかり板についてきた。

昨年11月のプロ野球ドラフト会議では、四国アイランドリーグの選手がふたり、めでたく指名を受け、選手とともに満面の笑みをたたえた石毛氏の写真が各紙の紙面を飾った。

「指名を受けたからといって、浮かれている場合じゃない。これから本人たちがうんと頑張らなくちゃいけないですね」

と言いながら、ドラフト指名を受けられる選手を2年で育てたことに対する自信もうかがわれた。

若者を育成すること自体、確かに大きな喜びではある。だが、四国アイランドリーグを創設し、経営していく立場であれば、味わうのは喜びばかりではない。特に、お金の苦労は大変なものである。

「2003年に僕は監督を務めていたオリックスを、契約年限を1年残してクビになりました。1年分の給料は手付かずで残ったわけですが、これを使って、以前から計画を温めていた独立リーグを実現したいと思ったんです」

以前務めていたテレビの野球解説者に戻ったほうが、経済的にはよほど楽だっただろうが、石毛氏は楽な道を選ばなかった。その選択を理解するには、石毛氏の野球人生を少しさかのぼらねばならない。

尊敬する指導者に導かれ プロ野球の世界に入る

石毛氏は千葉県の農家に生まれた。市立銚子高

校から駒澤大学に進み、社会人のプリンスホテルを経て西武ライオンズに入った。ライオンズに入団してからは俊足好守の内野手として、またバッターとして頭角を現し、新人王、シーズンMVPや日本シリーズMVPを受賞したほか、ゴールデングローブ賞に10回、ベストナインに8回輝き、西武ライオンズの黄金期を支えた名選手である。

日本で最高のアスリートが集うプロ野球界の中でも、屈指の実績を残した石毛氏。だが意外なことに、プロ野球への憧れは強くなかったという。

「だって僕、プロ野球選手じゃなくて、アマチュアチームの指導者になりましたから。自分は素晴らしい指導者に導かれて、野球を続けてきました。人間的に尊敬できる人がたくさんいた。自分もあなりたいたいと思っていたので、プロ野球の試合を見ることも滅多になかったんですよ」

尊敬する指導者が言うことだったら、あまり自分で深く考えずにそれに従ってきた。

「高校進学、大学進学、プリンスホテル入社、西武ライオンズ入団と、指導者の方から『ここへ行け』と言われて『ハイ』と返事をして、その通りにしてきました。自分で人生の選択をしたことなんてなかったですね。うちの選手がへこたれて『もうやめたい』と言ってきたときはこう答えるんですよ。『おまえは偉いのう。自分で人生の選択ができるなんて。俺なんて、自分で人生を選んだことなんてなかったぞ』って。はい、厭味ですね（笑）」

傍から見れば順調そのもののプロ野球人生も、石毛氏にとっては楽なものではなかった。不安で仕方がない。1年目は「自分はプロでやっていけるのか」と悩み、2年目以降は「今年はいい成績が残せるのだろうか」と悩んだ。

「不安を解消するためにはひたすら練習するしかなかった。だから、野球を楽しんでいると思ってやったこと

石毛宏典

四国アイランドリーグ
コミッショナー

業界常識の打破、新たな産業の創出——。ビジネスを通じた“新しい日本”創造の中心には、ビジョンを掲げ信念を貫き、決断を下すリーダーがいる。若者のプロ野球挑戦の場として石毛氏が設立した四国アイランドリーグ。その決断は、地域活性化や農業の人手不足解消へと広がりを見せ始めた。

決断の
瞬間

文・千葉望 / 写真・栗原克己

はないですよ」

この言葉に、プロ野球選手だけが知る苦労がうかがえた。プロ野球選手の第二の人生は厳しい。石毛氏のようにトップクラスの実績を残していても、監督としてクビになることもある。引退したかつての名選手が人生を誤ってしまうケースが散見されるのも、野球一筋で生きてきたための人生経験の少なさが災いしているのだろう。

アメリカの分厚い野球文化 日本の野球文化は衰退の危機

幸い、石毛氏は監督就任以前にさまざまな体験を積むことができた。引退後はダイエー球団職員としてロサンゼルス・ドジャースに留学。このときメジャーリーグだけでなく、3A、2A、1Aといったマイナーリーグ、さらには独立リーグによって支えられているアメリカの分厚い野球文化を肌で感じることができた。石毛氏が強く印象付けられたのは、若い選手が集う独立リーグである。人口10万、20万人程度の都市に独立リーグのチームがあつて、技術的には未熟な選手たちを町の人々が心から応援している。「おらがチーム」の選手が育つて、やがてメジャーリーグで羽ばたく日を待っているのである。

「日本人の若者が独立リーグで頑張っている姿も見ましたよ。だけど、そういう彼らを食いものにするブローカーもいるんですよ。日本に独立リーグがあればそんな苦労をすることもないのになあと、彼らを気の毒に思いました。」

また、バブルがはじけてから、企業がどんどん社会人野球から撤退していったことも大きいです。それまで大学や社会人野球は野球人育成の大きなステップでした。高校から直接プロ入りして大成するのは大変なことです。大学や社会人野球で鍛えられ、



独立リーグ設立で 若者のプロ挑戦を 地域で応援する

いしげ・ひろみち
四国アイランドリーグ コミッショナー。四国アイランドリーグを統括する株式会社IBLJ (Independent Baseball League of Japan) 代表取締役社長。1956年千葉県生まれ。79年駒澤大学経営学部卒業、プリンスホテル入社。81年西武ライオンズ入団。95年福岡ダイエーホークスへ移籍。96年現役引退。97年米国ロサンゼルス・ドジャースへコーチ留学。98年福岡ダイエーホークス2軍監督。2002年オリックス・ブルーウェーブ監督。04年株式会社IBLJの代表取締役に就任し、現在に至る。

自信をつけてそれから入っていったのに、そのひとつが揺らいでいる。日本の野球界全体が衰退してしまいかもかもしれないという危機感がありましたね。日本に独立リーグが根付けば、社会人野球の代わりになるかもしれないと考えました」

採算は明確でなくても 若者を育てる道を作りたい

オリックス監督に就任する以前から、石毛氏は本気で独立リーグの構想を練り始めていた。NHKの野球解説者だった頃、ハワイで行われていたウインターリーグを見たときは「ハワイなら日米豪・アジアで力を合わせた独立リーグができるかもしれない」と思うようになった。ウインターリーグの元締めだった日系三世のデュエン・クリス氏や、連続試合出場記録を持つメジャーリーガー、カル・リプケンJr.らと組んで、一緒に独立リーグを立ち上げようと準備を始めたが、このときはビザや税金の問題で挫折。


それなら日本で独立リーグを創設しようと方向転換し、経営コンサルタントにビジネスモデルを作ってもらって採算がとれるか検討してみた。答えは

「七分三分か六分四分でダメだって(笑)」。

だが石毛氏は諦めない。声を大にして構想を語り続けた。そのうち、耳を傾ける人々も現れた。最初は北海道を考えたが、照明付きの球場がわずかしがなく、断念。だがJ.C(青年会議所)の人々はけっこう本気になってくれたという。次は東北六県で考えた。移動距離は長いが、アメリカに比べれば大したことではない。交渉が中断したのは、監督就任が決まったからである。

「2年でクビになったとき、前々からの構想が復活しました。女房は不安がりましたよ。『採算はどれなの?』『つぶれない?』って。答えは『わからん』(笑)。だけど1年分残った監督の報酬は僕のお金ですから、『やりたいんだ』で押し通しました」

四国を選んだ理由はいろいろあり、地域の支援に目途が立ったことはもちろんだが、地域が広すぎず、四県が対抗意識を持っていることも大きかった。各県のチームを応援するのなら、対抗意識は強いほうがいい。選手は全国から集まった。あくまでも実力重視、地元選手を優遇することはなかった。選手起用などで横槍が入ることが嫌だったからである。結局、このときに思い切って四国アイランドリーグを設立したときが、石毛氏の人生最大の決断となった。



地域のために流す汗が 新しいスポーツ文化を 四国の地に生み出す



野球教室や農家の手伝いで 地域との交流を深める

今のところ選手たちの待遇は決してよくない。野球選手としての実力は今後の発展待ちなのだから当然のことではある。試合はバスを1台仕立てて出かけ、たいていは日帰りである。こうした状況でも野球教室なども盛んに行っている。地元農家の手伝いに出かける選手もいる。

こういう活動を通じて、地域の人々に親しまれ、球場に来てほしいという目論見はもちろんある。だが、石毛氏が考えるのはそれだけではない。日本を揺るがせているいくつかの問題、たとえば子供の教育問題や地域の疲弊、特に第一次産業の衰退に強い危機感を持ち、一石を投じたいと願う。

「僕は体育会育ちなので、スポーツの持つ効用を十分知っています。今、ろくに挨拶もできない子供がたくさんいるでしょ。だけどそういう子供たちだってスポーツの現場では大きな声で『お願いします!』と言えるようになるんですよ。スポーツの持つ効用はとても大きいんです。また僕は千葉の農家のせが

れです。農業や漁業のような第一次産業に携わる人たちがどんどん高齢化し、衰退していくのをなんとかできないものかと思っていました」

四国アイランドリーグの選手たちは若く、体力がある。彼らが試合のない日、農家の手伝いに行くことによって、地域の人々との交流が生まれた。頑張る選手たちを見れば、次は農家の人たちが球場に足を運び応援してくれる。そのような循環を生み出すためには、まず自分たちが努力している姿を見せることから始めなければいけない。

子供を守るための登下校時のスクールガードも行う。子供の安全に関してはみな関心が高いが、実行部隊が少なすぎる。ここでも若い選手たちが貢献できる。野球がやりたいと集まってきた若者が、野球だけでなく地域のことに汗をかいている。その姿を見てもらいたいという。

「野球選手は練習や試合に忙しくて、世間のことにうとくなる『野球バカ』になりがちです。一時はそれでもいいですよ。だけどもある年代からは、もった社会に対する関心も持たなくちゃいけない。そういう意味で、農家の手伝いなどの就業体験は大きな意味を持っています。いろいろなことが見えてくるし、将来の選択肢だって広がるんです。もちろん、やっている選手たちがみんなその意味をわかっているわけじゃないですよ。だけど気づくのが100人にひとりだっていいじゃないですか。強制的にやらされているうちに、大切なことを発見することだってあるんです」

ここでも石毛氏は、アマチュア時代に指導を受けた恩師たちのことを思い出す。石毛氏が指導された時代、大人たちは時間を惜しみなく使って子供や若者を育ててくれた。

「指導者って大変ですよ。本気になって指導すれば、人に嫌がられ、怖がられる。それを避けていたら人

なんて育てられません。何年か経ったあとでありがたかったと感謝されるものなんだと思うしかない」

Jリーグのあり方に学び 地域のスポーツ文化に貢献

実は、四国アイランドリーグを創設するときにもつとも石毛氏が参考にしたのは、野球ではなくサッカーのJリーグだった。

「川淵三郎キャプテンにはいろいろと相談にも乗っていたとき、本当に力になっていただいています。キャプテンは以前ドイツのサッカーが地域に根付いている姿を自分でご覧になって、このようなスポーツ文化を日本にも作りたいと思われました。Jリーグはただサッカーの試合を運営するだけでなく、幅広い活動を行っていますよね。その結果、今までにないサッカー文化が地方に生まれつつある。アルビレックス新潟がよい例です」

ここどころJリーグでは、全国の学校の校庭に芝生を張って、子供たちが思い切り遊べる環境を作ろうとするなど、さまざまな活動を行っている。ドイツでは地域のスポーツクラブが住民同士の交流の核をなしていた。練習や試合が終わったあとにも人々は家族ぐるみでクラブに残り、ビールを飲んで会話を楽しむ。ある意味で、スポーツのチームやクラブハウスが地域の宝になっている。

ひるがえって、日本の野球界はどうか。確かに野球文化は日本全国に広がり、草野球も試合も盛んに行われている。だが、試合が終わるとみんなユニフォーム姿のまま家で帰ってしまうのが普通である。それでは寂しい。もつと野球文化を豊かにしたい。石毛氏の夢はそこまで広がっている。

「もともと四国は恵まれているんですよ。海や山、川などの自然が豊かで、観光資源も豊富です。それ

なのに、地元の人たちは中央ばかりを見ている。東京経由でしか世界が見えない。これは日本の地方ならどこでも同じかもしれない。ただ、地方から直接アジアやアメリカ、ヨーロッパを見た方がいいわけでしょう？ 僕らが入ったことが刺激になって、中央にはない文化が生まれたら素晴らしいことですよ。まだ僕らの会社は赤字ですが、みずほらしくなく生き生きとしていければ、『いいよね』と言ってくれる人もいます。今後、道州制が具体化してくるかもしれないし、それをにらんで、野球だけでなくサッカーも立ち上がってくるでしょう。新しいプロスポーツが四国というくくりで盛り上がったならこんなにいいことはないと思うんです」

次々に石毛氏は夢を語った。

相手に見返りを求めず 尽くすことができるか

問題は、支援企業がまだ少ないこと。1社あたりの金額はそれほど多くなくてもいいから、たくさんの人々に支援してほしいと石毛氏は言葉に力を込めた。また、そうしてもらうために地域活動にも力を入れていくわけである。

「クサイことを言うようですが、僕は『愛』が大事だと思っているんです。見返りを求めず相手に尽くすこと。こちらがそれを持っているかどうか、相手は絶対見ていると思うんですよ。見ているから、『育成リーグなんか』と言わずに、ツアーを組んでまで応援に来てくれる人たちがいるんです」

昨年春のWBC（ワールドベースボールクラシック）で、日本の野球人は鍛えられた技術と根性を見せてくれたと石毛氏は喜ぶ。トップ選手の頑張り、独立リーグの頑張り。それぞれがよい効果を発揮して、新しい文化が地域にも根付くことを願う。